

ESSAY

都市景観賞と同時に募集した「福岡市景観エッセー」。今年は博多湾開港100周年にちなんで「福岡の海と景観」をテーマに募集。96作品の力作のなかから、4作品が選考されました。



遠くに光る海

林立するビル谷間に日本家屋

河東 佑子

YUKO KATO

中央区舞鶴

八月始め、ドイツからやって来た二人の女性、ハイジとエリカは、共に中学校の若い先生。ベランダから落ちそうになりながら熱心に写真を撮っている。被写体は、私には別に珍しくもない見慣れた街の風景。高いビルの中に、黒い瓦の伝統的な日本家屋のある風景は素晴らしい。新しいものと古いものが良く調和している。遠くの海が光っている。橋も美しい」と言う。見下ろせば、古い寺と、茶室、そしてそれに付随した苦むした日本庭園が、ゴチャゴチャと建ち並ぶビルの間に、窮屈そうにやつと息をついている。海を遮るように都市高速の橋が見える。

でも、そう言われて、あらためて見直したら、光に映えて輝くビルのガラス窓、マンシヨンのペランダを彩る花、きれいに並んだ駐車場の車の列。屋上から見ると、岸壁に休む沢山の漁船、ヨットの三角の帆も見える。遠くに船の汽笛も聞こえる。

海に近いこの街は、時に魚臭い風が吹き、魚を餌にするガラスが集まってくるけれど、やはり私はこの街が好き。彼女らに言われて、街の美しさを改めて見直した。彼女らの街を訪ねたとき黒々と聳える教会の塔、建ち並ぶ崩れ落ちそうな古い別荘群、魔窟と化した城

跡を美しいと思ったのに、彼女らは、「修理を怠ったので崩れかけていて恥ずかしい」と言ったのを思い出した。林立するビルの谷間に、古い伝統的な日本家屋を少しでも多く長く残していきたい。この平凡に見える光景が美しいのだ。

茶髪やプラット・ホーム・シューズの若者がたむろし、暴走族、なんば、喧嘩、引ったくりと、夜は喧騒の巷だが、道一つはずれば、新旧相入れながら調和している舞鶴、私は、自分の住むこの一帯が好きだ。

日本的風景が失われつつあると言われる。もう止めがないとあきらめたり悔やむより、良いところを見つけよう。懐かしさを要素を手がかりに次を考える。視線が縦糸横糸となり風景と記憶を紡ぎだす。視覚的感覚も秀逸。

(選考委員 永崎 明子)

